

## 研究所だより

「いま『協同』を問う」96年全国集会在、11月23日～24日仙台の国際センターを会場に行われることが決まりました。第1回の実行委員会が行われ、賛同者や今後実行委員会に参加して頂く方々への要請を幅広く組織して行くことになります。東北地方への会員の方への参加要請はもちろんですが、「協同」運動に関心をお持ちの方を幅広くご紹介頂きたいと思ひます。

12月2日～3日、第2回「協同のための北海道集会」が約200名の参加で行われ、地域での様々な活動の中に協同の力強い息吹を感じ、前回(93年6月)より一層の広がりが確認できる集いとなりました。こういう集会に参加し、充実した報告を聞くたびに、これらの活動の持つ社会的な意味を明らかにし、理論化して行く協同総合研究所の使命を痛感します。集会を継続し、様々な活動を記録として留め、新しいネットワークが築かれて行くことを参加者の一人として主体的に関り実践して行きたいと思ひます。集会の記録は2月をめどにまとめる予定です。

労働者協同組合法の法制化プロジェクトでモデル定款と法案要綱の作成を急いでいます。事務局の取組の遅れから、新年早々急ピッチで作業をすすめることになりそうです。予定通り進めば、5月の段階で所報に公開できる運びになりそうです。実際の活動を進めていらっしゃる方々の意見もその時点で伺いたいと思ひます。1月13日の基本研究会では法制化との関連で、労働者協同組合の非営利性・公共性に関して財政学の立場から京都大学の池上先生にご報告頂く予定です。

埼玉大学で「仕事を考えるシンポジウム」を開催する準備を進めています。私立大学と違い就職には大学当局はそれ程積極的ではないようですが、大学生協では地元の中小企業を招いて学生に面談の機会を提供したとのこと。学生自治会でもアンケートを採っており、1年生から就職不安があるというし、教育学部では教員になるのは3割

で、既にあきらめている学生も多いという話も聞きました。また、教職員の間でも退職後の問題が関心事となってきており、労働組合レベルでも高齢者協同組合などと連帯した仕事おこしの必要性が生まれています。地域での様々な仕事おこしの実践に学びながら、共感をえられるシンポジウムにしたいと思ひます。なお、大学生協連へも、各地の大学で同趣旨のシンポの共催を申し入れてあります。

センター事業団の事業所長を対象に「協同を考える」講座を継続してやって行くことにしました。私自身がセンター事業団の仕事に携わっていた時から学習・教育の遅れを感じていました。仕事の忙しさにまぎれ、学習ということはつつい後景におしやられてしまいます。「本を読め」と様々紹介しても中々読まないのが実態です。それなら少し強制力も働かせ、この「この講座に参加しないと遅れる」という意識をもってもらえる企画と講師陣をお願いし、参加者からは適当な受講料を頂くことで、「その分学んでやろう」という意識も刺激し、真剣に聞いてもらい、新たな問題意識や学ぶ意欲を引き出すことができれば正解だと思っています。次回の講師を大学生協連の岡安専務にお願いしていますが、氏のマネジメントに関する考え方とそれを弛まず組織の中で実践してこられた姿勢に、多く学ばされるものがあります。

バブル経済の後遺症に市民が振り回される中で、雇用問題の深刻さが追い撃ちをかけています。しかし、戦後50年を節目ととらえ、誰もが次の21世紀をどう豊かにするのか考えた年だったとも思ひます。日本労働者協同組合連合会が呼び掛ける高齢者協同組合運動をはじめ、様々な市井の協同運動が確実に広がっていることを実感します。そこにひかりを当て理論化し、ネットワークを築くこと、そして次の社会へ向け非営利・協同の時代にふさわしい対案を示すことが、ますます強く求められる年になりそうです。(坂林 哲雄)